

モンテッソーリ教育における宗教性と カトリックからの批判をめぐって

前之園 幸一郎

〔キーワード〕 マリア・モンテッソーリ、宗教的敏感期、カトリック文明、
回勅『青少年のキリスト教的教育』、実証的教育学

はじめに

マリア・モンテッソーリの主著『子どもの家における幼児教育に適用された科学的教育学の方法』は、初版が1909年に出版された。その後、著者自身による絶え間ない加筆、修正、削除の成果として改訂版が1913年、1926年、1935年に刊行され、それが1950年には『子どもの発見』と改題されて出版された。その四回にもわたる改訂作業の背後には、モンテッソーリ自身の学問的深まりとともに彼女の人間的円熟による透徹した子どもへのまなざしがあった。しかし、また同時にイタリアの政治的、宗教的な社会的環境の変化も『方法』の改訂に大きな影響を与えることになった。本稿では、1926年の『方法』第三版の改訂を中心に検討しながら、カトリックの陣営からの彼女への批判に応えつつ、モンテッソーリが「コスミック教育」の構想にいたる経緯について考察を行いたいと考える。

I 実証的教育学と宗教教育

実証的教育学の確立をめざすモンテッソーリは、宗教教育の問題も実証的教育学によって解決されるべきだと考えていた。そのことは、「重要性がまだ十分には感じられていない宗教教育の問題も実証的教育学によって解決されねば

ならないだろう。」との彼女の言葉によって明言されている。¹⁾彼女は、また「教育学もまた、医学がすでにそうしてきたように、実験の実証的調査にその基礎をすえることによって純粋に思弁的な領域から脱することをめざしている」²⁾とも述べている。

そのような科学的立場に立ちながら、モンテッソーリは人間の宗教的感情を頭から否定することはできないとして、次のように述べている。「人間が持つ宗教的感情を先験的に否定するならば、また宗教的感情の教育を人間から奪い去るならば、われわれは教育的誤りを犯すことになるだろう。それは、子どもが持つ理解力や知識への愛を先験的に否定することで犯した過ちと同様のものである。またそれは、見かけの上でしつけられたようにするために子どもを奴隷の状態に調教したのと同じ過ちである。」³⁾

モンテッソーリは、さらに米国人実証主義者ウィリアム・ジェームスの言葉を引用して「宗教意識」(coscienza religiosa)の重要性に着目している。そして教育における人間救済の期待において「大きな宗教的勝利」(un grande trionfo religioso)の可能性が存在すると考えている(*Il metodo*, 1909, p. 277.)。しかし彼女は、実際にはまだ「子どもの家」において宗教教育についての特別な具体的観察は行っていない。

さて、1910年にモンテッソーリの著書『子どもの家の幼児教育に適用された科学的教育の方法』(以下、『方法』と略称)に対するイエズス会定期刊行物『カトリック文明』(La civiltà cattolica)の書評が現れる。⁴⁾それは、『建築と教育学の新しい改革』と題する論文であり、「子どもの家」における実践と実験への強い関心を表明しながらも、カトリック側から行われた最初の批判でもあった。その中心的論点は、自由にもとづくしつけの原則、賞と罰の撤廃、後退した教師の指導性の位置づけなどにおかれていた。「マリア・モンテッソーリは、明らかにわれわれとは異なるやり方で従順さについて語っている。そのことだけでなく、さらに過度の楽天主義に陥り、古典的教育学の不変の諸原理に矛盾する結論にいたるその他の多くの点において、彼女とわれわれとは、一致点を見出すのに立場が大きくかけはなれている。なぜなら、(彼女による

と一筆者)人間本性そのものにもとづくものとして、例えば、子どもは自由そのものの活発な表明を通して自立の獲得に向かって教育されねばならず、また自由、自立とともに、子どもには賞と罰の廃止が行われなければならないとされているからである。⁵⁾

同論文は、『方法』の教材、「子どもの家」の組織化、子どもの身体的生活の世話などの部分についての厳しい批判を行っているが、しかしモンテッソーリがその著書の結論部分で「勇気を持って宗教教育の必要性を述べている」ことには賛意を示しながら論文を締めくくっている。⁶⁾

さて、モンテッソーリが実証科学から学んだ重要な視点の一つは、問題を個別的、断片的にはではなく、トータルに把握する姿勢であった。例えば、ロンブローゾが犯罪者の生まれる原因を個人的な問題に閉じ込めるのではなく社会的な責任の問題から理解しようとしたように、モンテッソーリは人間を取り巻くあらゆる不幸を社会的責任として、またキリスト教的同胞の意識に立つ教育の問題として考えようとした。

バルセロナにおける「母性の家」(Casa della Maternità)の実践は、モンテッソーリの市民的責任、宗教的意識、科学的関心にもとづいて宗教的・道徳的な教育実験として生まれたものであった。その経験の成果は、『教会に生きる子どもたち』(I bambini viventi nella Chiesa) (1922)として発表された。その中でモンテッソーリは以下のようなことを思い起こしている。

「産院の司祭たち」(Padri della Maternità)にはモンテッソーリの『方法』は「その実質においてカトリック的である」(fosse cattolico nella sua sostanza medesima)と思われた。すなわち、その教育学の諸原理は「彼らには、カトリック主義から直接に導かれ発せられているものだと考えられていた(sembravano loro emanati e ispirati direttamente dal cattolicesimo.)」。これらの言葉は、バルセロナにおける産院の司祭たちがモンテッソーリの活動に対して寄せた関心を物語っている。

一方、モンテッソーリは、自分自身が深いカトリックの信仰を持っていることを1922年のその著書の中で明らかにしながら、心理学的な方向の追求も続け

ている。そして、彼女の方法の諸原理にもとづいて行われた宗教教育の実験が「長い間の念願であった子どもにおける魂の生活の内部により深く入りこむという好都合な機会」を彼女に与えた⁷⁾と述べている。

そこで、彼女は、子どもの霊的な諸必要についての知識を深める目的のために、子どもたちに適した雰囲気を持つ礼拝堂を準備し、子どもに受け入れられやすいような典礼を作った。その実験が、後に見るように『方法』第三版の1926年版においてモンテッソーリに宗教教育への扉を開き、そこへ向かわせることになった。

モンテッソーリの活動に対して、カトリックの側からはつねに注意深く慎重な視線が注がれていた。それを具体的に示すのがイエズス会司祭 M. バルベラ神父 (padre Barbera) による『カトリック文明』に掲載された論文である。その論文「子どもの家と自己教育」「子どもの宗教教育に適用されたモンテッソーリ法」⁸⁾を見ることにしよう。

バルベラ神父は、モンテッソーリの教育学が基本的にはカトリックの立場と矛盾するものではないとしながらも、彼女の思想の実証主義的姿勢に疑問を投げかけている。そして、カトリック的立場と調和するように意味の調整を試みながらではあるが、モンテッソーリの説く自由、自己教育、自立などに対しては伝統的な立場から厳しい解釈と注文を加えている。

バルベラ神父が強く指摘したのは、特に次の点である。モンテッソーリは、伝統的な教育学に学ぶことなく、現代的な実験にだけもとづいて教育の全体的組織を確立したいと望んでいる。しかし、彼女は、「彼女のもろもろの言葉が述べているように、彼女自身の力によってようやく戦い取ったその〈科学的〉教育が生み出す多くの誤謬に自ら陥ることになるだろう」⁹⁾。同神父はさらに続ける。「もし彼女が教育的活動をより容易なものとする新しい実験的諸観察を総合した提案を行なう意図があるならば、われわれは何ら反対しないのみならず、彼女の諸提案を大きな恩恵として歓迎する。」¹⁰⁾

モンテッソーリは、カトリックの側からの彼女の研究態度における過度に実証的姿勢への厳しい批判を受け入れながら、キリスト教の人間形成の道を模索

せざるを得なかった。その批判は、1926年の『方法』第三版における修正として受け入れられている。具体的には、次の通りだ。すなわち、1909年ならびに1913年版『方法』においては「教育学的実験は、教育学を再建することを目指す新しい諸原理の具体的実現の道を開くように見える」と彼女は述べていた。¹¹⁾その立場は、教育学も、医学のように実証的な実験の結果にもとづいてその基礎をすえることにより、純粋に思弁的な領域から脱することができるというものであった。

ところがその立場は、1926年版『方法』においては次のように修正されている。すなわち、「子どもの家」における教育的実験は、「思弁の諸原理の自然的基礎から教育学を切り離すことなく、科学的実験による成果の最大の活用を教育学に与えようとする新しい諸方法の具体的実現に道を開くものであるように見える。これまで、教育学も、医学同様に、純粋に思弁的な分野から脱却し、実験の実証的な調査にその基礎を置かねばならないとの誇張した主張がなされ、それが十数年にわたり語られてきた。」¹²⁾

『方法』第三版においては革新的であることに対するモンテッソーリの慎重な態度がうかがえる。むしろ柔軟な態度へと彼女は変化している。なぜなら、1909年と1913年版『方法』において彼女が希望として語っていた言葉、つまり「教育学の理論的革新に明らかに有効な材料を準備してきた実験的諸科学と、実践的教師の教育技術との真の統合」が大学において達成されるだろうとの文言が1926年版『方法』では削除されているからである。¹³⁾

モンテッソーリは彼女に向けられた批判に応えながら、教育の科学的方法としての彼女の教育活動を1926年版『方法』において提案している。

特に、注目されるのは、1909年版、ならびに1913年版『方法』にはなかった「序章」(Introduzione) が1926年版『方法』には付け加えられていることである。そこには1918年に教皇ベネディクトゥス十五世によって与えられた祝福の言葉、「教皇の祝福が、モンテッソーリの『方法』が実り多いものとなるようにとわれわれが祈る恩寵と天の恩恵のあかしとなりますように」が書き加えられている。¹⁴⁾それは、教皇庁がモンテッソーリの仕事を評価する好意的な態度を

示しているとして、カトリック信者たちを安心させるために彼女が発したメッセージの意味を持つものであったと思われる。

さらに注目されるのは、第3版『方法』に新たに「宗教教育」(L'educazione religiosa)の章が設けられたことである。その内容は、1922年に刊行された『教会に生きる子どもたち』(I bambini viventi nella Chiesa)で述べられていることが骨格をなしている。それによると、宗教教育は、『方法』全体の一般的教育方針にもとづいて行われるが、子どもたちが日常生活的な活動を通して、さまざまな宗教的現象にふれるのに適した環境を整えることを含んでいる。そしてそのような活動の展開のために子どものサイズに応じた典礼的教材が準備されなければならない。

さて、この「宗教教育」の章における従来顧みられることのなかった主要なポイントは、子どもの内面生活の必要から生まれる宗教的敏感期(un periodo sensitivo religioso)の存在への着目である。それまで宗教的感情(sentimento religioso)としておおざっぱにしか考えられていなかった問題が、そこでは中心テーマとしてすえられることになったのである。それについてモンテッソーリは次のように述べている。

「子どもたちは、自然的事柄と超自然の事柄とを識別することができるので、その彼らの直感力が、彼らに宗教的敏感期のあることをわれわれに教えてくれる。身体の発達がそれを変化させつつある自然の諸法則に緊密に依存しているように、幼児期は神と結びついているように思われる。私は、二歳の女の子のことを思い出す。その子は幼児イエスの小さな彫像の前に立ったとき、
 <これは、お人形さんではありません>と言った。¹⁵⁾モンテッソーリは、子どもたちが宗教的直観や衝動において鋭敏になる時期に着目して、宗教的敏感期は《魂の敏感期》(periodo sensitivo dell'anima)でもあると考えた。そしてこの時期の宗教教育は人間形成の重要な一部をなすものだとしている。

『方法』初版において「宗教教育の問題もまた、まだその重要性が十分に認識されていないが、それは実証的教育学によって解決されねばならないだろう」と述べられていたことはすでに見てきた。ところが、この個所が『方法』

1926年版においては、宗教教育の問題は、「宗教にもっとも重要な地位を与え
るやり方で解決されねばならないだろうとわれわれは深く感じている」と改め
られている。¹⁶⁾モンテッソーリは、その教育思想の深化の過程でカトリックから
の批判を柔軟に理論の中に取り込んだのであった。

II 回勅『青少年のキリスト教的教育』(1929)と『方法』

第三版(1926)に対するカトリックからの批判

教皇ピオ十一世によって1929年に回勅『青少年のキリスト教的教育』
“Divini illius magistri di Pio XI”¹⁷⁾が出された。そしてその翌年の1930年に
カトリック側からの『方法』第三版(1926)に対する批判的反応が明らかにさ
れる。それは、『カトリック文明』に掲載されたバルベール神父による論文
『モンテッソーリ法における光と影』¹⁸⁾であった。このイエズス会神父の論文は、
モンテッソーリの活動を一応評価しながらも、カトリックの教えに必ずしも忠
実でないモンテッソーリの発言や彼女の執筆した文言に対し厳しい注意を向け
ている。

回勅『青少年のキリスト教的教育』には、「人間と教育学的自然主義」
(L'uomo e il naturalismo pedagogico)の章が設けられている。そこでは、
教育について次のように述べられている。「青少年の教育においては、キリス
ト教的で超自然的人間形成をいささかでも排除するようないかなる自然主義的
教育学も誤りである。また、部分的であれ全体としてであれ、原罪と恩寵の否
定を行い、それを忘却させ、したがって人間本性の諸力にのみ基礎をおくいか
なる教育の方法もあやまりである。それは、一般的には、子どものいわゆる自
主性と自由を当てにして、権威と教育活動を損ない、それを消滅させようとす
る多様な名称の現在の教育諸方法を指している。そのような方法が、その教育
活動において子どもを排他的に主導的地位に立たせ、自然的で神聖な最高の法
則とは無関係の活動を彼らに認めているからである。」¹⁹⁾

さらに回勅は、原罪の諸結果が人間本性の中に存続しつづけているとの原則

的立場に立っている。そのため混乱した子どもの諸傾向を矯正するためには、ソロモンの箴言にあるような鞭が必要になるとしている。そして聖句「『若者の心には無知がつきもの。これを遠ざけるのは諭しの鞭。』(箴言, 22, 15) が引用され、もっとも柔軟な幼児期から混乱した多くの性癖は矯正されるべきであり、望ましい性格が助長され伸ばされるべきであるとしている。とりわけ、超自然的真実と恩寵の力とともに、知性は生き生きとさせられ、意志は鍛えられるべきである。鞭なしには、邪悪な性癖を統御することもできなければ、しかるべき道徳的完成に到達することもできない²⁰⁾」としている。

回勅は、原罪を否定し、人間の力 (le forze umane) のみで人間の形成が可能だとする教育学的自然主義への厳しい批判を行っていた。それではモンテッソーリの著作を回勅の光に照らして分析するとどうなるか。バルベール神父は『カトリック文明』における論文「モンテッソーリ法における光と影」(1930)で次のように指摘する。

「英語版『教会に生きる子どもたち』(1929)や、『方法』第三版(1926)などカトリック信者たちの間に広められることになっているもっとも最近の著作において、モンテッソーリは、しばしば自立性 (autonomia) や自由 (libertà) などに言及し、その解釈においてそれらが本来そうであるべき妥当な意味を歪めている²¹⁾」それを明らかにするために、バルベール神父は、その論文の注において具体的な例として『方法』第三版(1926)で述べられている賞 (premi) と罰 (castighi) についてのモンテッソーリの見解を引用している。

事実、『方法』第三版において、モンテッソーリは賞と罰の導入に関してゆるやかな立場に立っている。賞と罰に関して、1909年版で彼女は次のように述べていた。「軍隊において英雄的行為が消滅するとき、賞罰は、それによって退廃を生みながら、崩壊の行為を成就すること意外の何ごともなし得ないであろう²²⁾。」

ところが『方法』1926年版では、この個所に注がつけられ、賞罰についての彼女の立場が次のように語られている。「賞と罰についてわれわれが述べるいかなる場合も、われわれは本質そのものにもとづいている根本的な教育学的な

価値を過小評価することを意図するものではない。われわれはただ目的と手段が取り違えられている賞罰の乱用と墮落に対して闘うことを意図しているにすぎない。事実、自然の常識にしたがえば、賞と罰はある行為が善か悪か、称賛されるべきか非難されるべきかを具体的にわからせるためのまさに手段にすぎないからである。²³⁾」

さらに、モンテッソーリは『方法』1926年版では賞罰を論じた章のタイトルの変更を行っている。そこでは、『方法』初版ならびに第二版における単刀直入のタイトル「賞と罰の廃止」“Abolizione dei premi e dei castighi”は削除された。そして、第三版では、章のタイトルが「賞罰に対するわれわれの子どもたち」“I nostri bambini innanzi ai premi ed ai castighi”（クリティカ版, p. 211.）に改められている。バルベール神父は、『方法』第三版には自然主義の影が時々顔を出しているとしながらも、このタイトルの修正に対しては高い評価を行っている。

しかしながら、バルベール神父のモンテッソーリ評価は、以下の問題については突然厳しいものとなる。その批判の対象となったのは1930年1月25日に開催された第15回国際モンテッソーリ・コース開会式におけるマリア・モンテッソーリの発言である。バルベール神父によると、先ず「多様な考えと信仰を持つ聴衆」(ad un pubblico vario di opinioni e credenze) に対する彼女の誇張に満ちた大げさな言葉づかいが慎重さを欠いている。しかも、わずか一月足らず以前のことににもかかわらず、モンテッソーリは1929年12月31日に公布された教皇ピオ十一世による回勅『青少年のキリスト教的教育』“Divini illius magistri” に関しては何ら言及していないのみならず、それをまったく念頭にさえ置いていない。

国際コースの開会式におけるモンテッソーリのあいさつは、以下のような内容であった。

「今日、子どもの心の解放は歓迎されねばならない。なぜなら古い教育的方法の強制のもとにおいて、子どもはこれまで苦痛に満ちた存在であり、彼らはその知的、道徳的能力において小型化された人間であるとされてきたことが明

白になったからである。²⁴⁾」

さらにその結論部分でモンテッソーリは述べている。「われわれの研究は、一方では子どもが発達するための諸方法の発見に向けられており、他方では（子どもに対する一筆者）教師の側における個性の制限ないしは排除のための方法の発見に向けられている。²⁵⁾」すなわち、教師による子どもへの過度の干渉の排除が強調されていた。

また、さらに繰り返して次のようにも述べられている。「われわれの研究は、一方では子どもの発達に必要な諸方法を発見する研究であり、他方ではわれわれが（子どもに）干渉しないようにするための諸限界を明らかにする研究でもある。われわれは、前面にしゃしゃりでるべきではなく、度を越さないように自制し、自由に解放された子どもがわれわれに明らかにしてくれることを観察しなければならない。その観察の結果は、教師の心に長い間にわたって沈殿したままになっている考えとはまったく異なる新しい考えへと導くであろう。＜心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない＞（マタイ、18. 3）と述べたキリストの言葉が、われわれにそのことを思い起こさせてくれる。²⁶⁾」

バルベラ神父は、この発言に対してモンテッソーリのこの聖句の解釈は間違いだとしている。そこで述べられているのはキリストを信じる子どものことであり、それは子どもたちの中に恩寵の超自然的生命が宿っているということを語っているに過ぎないからだとしている。したがってイエス・キリストは子どもに「自然の善性」(bontà naturale)を与えているのではなく、彼らのキリストを信じる無邪気さと謙遜さを述べているだけに過ぎない。それを欠いては天国には入ることができないからだ。そこでバルベラ神父は、モンテッソーリのその解釈は余りに自然主義的であるとして彼女を厳しくたしなめている。

また、モンテッソーリは、その講演をソロモンの子ども観は古くて不適切な考え方であり、今日では、新しい世紀にふさわしい新しい感性にもとづく子ども観が求められていると切り出した。そして、「子どもが、これまで公立学校においてはかわいそうな存在であったことがようやく最近になって明らかになっ

ている。彼らは、実際に、その身体的エネルギーにおいて、特に道徳的、知的エネルギーにおいて小型化された人間にしか過ぎなかった。」また、「子どもの諸欲求についてのより確実で明確な見通しを持って子どもを教育する」ために、子ども研究には多くの努力がなされてきた。幼児期についてこれまで人間が抱いていた観念は、新しい世紀になって時代遅れのものであることが明らかになっている。それは、「例えば、＜子どもを罰しないなら、さもなければお前たちは子どもの墮落の原因となるだろう＞と言ったソロモンの時代の考え方である。今世紀の教育的進歩は、「無垢な子どもを抑圧してきた重苦しさ」とともに、まさにこの「古くさく原始までさかのぼる過去の賢者たちが抱いていた観念」の過酷さをやわらげることにあると思われるとしている。²⁷⁾

回勅の厳格さに対して、モンテッソーリは近代教育の実証主義的で革新的な立場を明確に打ち出した。そしてそれは、大人に対し自己変革を迫るものであった。一方、回勅によれば、子どもの解放を訴える思想が受け入れられるならば、子どもは横柄さの奴隷となるだろうとされている。ところが、モンテッソーリが1930年の講演において強調し批判したのは、まさに教育における大人の子どもに対する傲慢な姿勢であった。彼女が大人に自己変革を求めたのは、大人によって子どもに強いられるもろもろの強制を取り除かねばならないとするその基本姿勢からであった。

バルベール神父にとっては、このモンテッソーリの考えは受け入れがたいものであった。回勅の公布直後にもかかわらず、そこに展開されている彼女の考えは、個人主義や客観主義にもとづく反カトリック的な世俗主義と自由主義思想に映じたからである。そこでこのイエズス会神父は、モンテッソーリが教育に革命を持たむのではなく、伝統的教育を推し進めるのにふさわしい教育方法を明らかにするようにと求めている。

さらに、1930年にモンテッソーリ批判を行ったもう一人の人物がいる。M. カゾッティ (Casotti) である。彼も、バルベール神父と同様の立場からモンテッソーリ思想の光と影について鋭い視線を注いでいた。²⁸⁾

カゾッティは、モンテッソーリ思想に内在する二重の問題点を指摘する。そ

れによるとモンテッソーリは、教育的経験と教育方法のレベルにおいて確かに豊かな成果を蓄積している。しかし彼女は、理論的なレベルにおいてその成果をかならずしも十分に体系化してはいない。教育方法と教材に限定して考察するだけでも次のような限界が指摘できる。

先ずその教材は、あまりに高価である。その上、それは、實際上、より適切な他の教材に置き換えることも可能だと考えられる。例えば、幼児の精神は、個別化され断片化された対象よりも、具体的な対象をよりよく認識する。例えば、子どもは幾何学図形による練習よりも、自分の経験により身近な対象によって具体的に学び、よりよく認識を深める。

アガッティ姉妹は、モンテッソーリの機械的で唯物論的な教材観を回避しようとして、よりよく現実に適する教材を考案している。子どもの認識は、身近な対象に対する具体的な活動の展開によって得られるからである。したがって、モンテッソーリの教育方法に内在する影は、抽象主義、図式主義、厳格主義として特徴づけることができるとしている。

さらにカゾッティは、教育思想におけるモンテッソーリは時代に先んじて進歩的であるにもかかわらず、その教材観は旧式の形式主義に固執していると批判している。

カゾッティと同様の批判を行ったのは、ロンバルド・ラディーチェである。彼は、＜二人のモンテッソーリ＞というイメージによって彼女を論じ次のように述べた。「モンテッソーリについては、彼女が一人ではなく、二人いることに留意しなければならない。われわれは、イタリアの教育学の伝統の精神と大きく一致する彼女か、あるいは教育変革の諸理想と大きく一致する彼女かを選択しなければならない。」²⁹⁾ すなわち、ロンバルド・ラディーチェは、彼女が「教材を厳格さのなかに閉じ込めたモンテッソーリ」「L'una chiusa nelle rigidità del materiale」と「＜子どもの家＞の創設によって幼児の生活の豊かさを開いたモンテッソーリ」「l'altra aperta alla ricchezza della vita infantile con la creazione delle Case dei Bambini」の二面性を持つことを指摘している。

Ⅲ モンテッソーリからの反論と「コスミック教育」

モンテッソーリに対するカトリック陣営からの批判は、当然のことながら機関誌『モンテッソーリ』“*Montessori*” にその影響が反映されている。ちなみに、すでに1927年から1929年まで「イタリア・モンテッソーリ協会」“*Opera Nazionale Montessori*” の機関誌として『モンテッソーリの理想』“*L’idea Montessori*” が存在していた。機関誌『モンテッソーリ』は、モンテッソーリ自身の編集になる月刊誌として1931年1月15日に創刊号が発行された。しかしそれは第5号まで発刊されて、同年に廃刊となった。さらに翌1932年2月にそれは再刊されたが、今回は隔月刊となり同年12月に第6号で最終号となった。1932年からは『モンテッソーリ運動』“*Opera Montessori*” が、モンテッソーリ教育を普及するための隔月刊の会報として出版された。しかしそれは1934年のモンテッソーリのイタリア出国によって終刊となった。³⁰⁾

さて、カトリックのモンテッソーリ教育批判に反論する注目すべき二つの論文が、機関誌『モンテッソーリ』に掲載された。その一つはモンテッソーリによる《精神的反応》である。それは、子どもが生まれながらに持っているといわれる＜悪＞についてモンテッソーリの見解を示したものである。³¹⁾

ついで、二つめは、匿名の《モンテッソーリ法に関するカトリックの光と影》である。これは、バルベーラ神父ならびにカゾッティの批判に対する反論である。³²⁾

さてモンテッソーリは、第一の論文《精神的反応》において子どもに対する大人の素顔の感情について論じている。彼女によると、大人の子どもに対する行動は、しばしば二面性を持っている。一面では、大人は＜子どもは純粋である＞として、子どもへの無制限の愛を口にする。しかし同時に、「大人の前に＜人間に生まれつきの悪＞の姿をさらけ出し、その悪、つまり原罪と闘うように大人に仕向ける」子どもに対して、大人はそれを矯正し罰しなければならないと考える。そのことは、大人の愛情に満ちた子どもへの態度が、実際には、

子どもが従属的地位の存在であることを当然の前提にしていることを物語っている。

モンテッソーリは、回勅『青少年のキリスト教的教育』に引用されたソロモンの箴言についても考察を行っている。しかし、そこでは回勅にある聖書の聖句が厳密にそのまま引用されていない。彼女は、聖句のその趣旨だけを引用して《あなたの子どもを罰することを恐れてはならない。鞭を控える父親は、わが子を憎むものだ。彼を地獄に落とすからである。》と意識している。

さて、モンテッソーリによると、この教えは、愛ゆえに罰を加えることを正当化している。そこで、この教えが大人同士の関係に適應されるとどうなるだろうか。こん棒で日雇い労働者を殴り付ける雇い主は、彼を愛しているのか。激しい鞭打ちを加える主人と奴隷との関係において愛情は存在するだろうか。そこに見られるのは自己の所有物としての奴隷に対する主人の態度でしかないだろう。このような説明を加えることを通してモンテッソーリは、聖書の教えに秘められている精神とそれによって形成されてきた子ども観を間接的に批判しようとしている。そして、不寛容、不信、疑いを中心とする伝統的子ども観が、幼児の能力と可能性に対する認識を妨げてきたとしている。ソロモンの智慧の中に、モンテッソーリは子どもに対する抑圧的な伝統的教育の表現を読み取っていたのである。

匿名論文《モンテッソーリ法に関するカトリックの光と影》は、バルベール神父の批判からモンテッソーリ法を擁護することをねらいとしながら、次の二つの基本的な問題を明らかにしている。その一つは、カトリック陣営との対話を何としても継続したいと考えているモンテッソーリの意図についてである。他の一つは、カトリックによるモンテッソーリ批判の根底に、自由の概念をめぐる問題、ならびにカトリック的立場からの自由についての解釈の問題が存在しているとの認識である。匿名論文は、この自由をめぐる問題を「カトリックの影」と呼んでいる。それは、煎じ詰めると、子どもにおける原罪の存在を承認するか否かの問題に逢着せざるを得なかった。しかもモンテッソーリにとっては、彼女の子ども観を否定ないしは大きく修正することなしには、「子ども

の原罪」にたつ子ども観を全面的に受け入れることはできなかった。同時に、モンテッソーリは、カトリックとの良好な関係を維持することによって、その強力な影響力のもとに彼女の教育法をイタリアにおいて一層発展普及させたいと願っていた。

1909年の『方法』の初版刊行以来、モンテッソーリはカトリックとの間で多くの和解の試みを繰り返してきた。例えば、1926年の第三版『方法』においては、既述の通りそれまで存在しなかった「序章」が書き加えられた。また新たに「宗教教育」の章が特別に設けられた。しかし、そこでは原罪の教義の承認についてまでは考慮に入れられていなかった。

科学とキリスト教主義とを共存させようとの個人的確信にたつモンテッソーリは、これまで譲歩に譲歩を重ねてきた。また、彼女の活動に対して繰り返されるカトリックからの批判に応えるために彼女は彼女なりに多くの努力も払ってきた。しかし、今やすべての努力が不首尾に終わったことが判明した。何を行っても八方ふさがりで徒労に終ることが明白となった。求められるままに自分の考えと教育理論の修正を繰り返して仮にカトリック陣営との和解を維持できたとしても、モンテッソーリは、最終的には自分の教育心理学と「新しい子どもの発見」を全面的に否定せざるを得なくなるだろう。しかも彼女には自己否定につながる全面的な理論的転向を行う気などまったくなかった。

このようなカトリック陣営との厳しい関係を中心とする国内事情を背景に、モンテッソーリは世界の多様な宗教と文化のもとに生きる子どもたちに目を向けるようになった。その反省が、彼女の国際的視野を広げていった。そしてついにモンテッソーリは重要な決断を行うこととなる。カトリック的宗教教育に固執することを断念したのである。彼女は、その決意とともに1934年に祖国イタリアを後にする。そして後にカトリックをも包摂する宇宙的広がりを持つ理論としての「コスミック教育」の構想が、モンテッソーリの中で生み出され理論化されることになる。しかし「コスミック教育」については、稿を改めて論じられなければならない。

注

- 1) M. Montessori, *Il metodo della pedagogia scientifica applicato all'educazione infantile nelle Case dei bambini*, Città di Castello, Editrice S. Lapi, 1909. (以下, *Il metodo* と略称) p. 276.
“Anche il problema dell'educazione religiosa, la cui importanza ancora non sentiamo pienamente, dovrà essere risolto dalla pedagogia positiva.”
- 2) *Il metodo*, 1909, p. 5.
“anche Pedagogia, come già fece la Medicina, tende a esulare dai campi puramente specurativi, per fondare le sue basi sulle indagini positive dell'esperienza.”
- 3) *Il metodo*, 1909, p. 276.
“Negando a priori il sentimento religioso nell'uomo, e privando l'umanità dell'educazione di questo sentimento, potremmo incorrere in un errore pedagogico, simile a quello che ci faceva a priori negare nel fanciullo l'amore alla conoscenza e al sapere: e che ci spingeva a domarlo nella schiavitù, per renderlo apparentemente disciplinato.”
- 4) *Una nuova riforma edilizia e pedagogia*, non firmato, in *«La Civiltà cattolica»*, a. 61°, quaderno 1429, 1 gennaio 1910, pp. 82-87.
- 5) *ibidem*, p.86.
“Maria Montessori parla della obbedienza in modo che non è certamente il nostro; nè in questo solo, ma in parecchi altri punti siamo ben lontani dal poterci accordare con lei, per venire a conclusioni che peccano di soverchio ottimismo e contraddicono a' principii immutabili della pedagogia classica, perché fondati sulla stessa natura umana, come p.e. che il bambino debba essere educato, colle manifestazioni attive della propria libertà, alla conquista della indipendenza, e che con ciò si debba arrivare alla abolizione dei premi e dei castighi.”
- 6) *ibidem*, p.87.
“Nella conclusione dell'opera ella inculca coraggiosamente la necessità della educazione religiosa.”
- 7) M. Montessori, *I bambini viventi nella Chiesa*, Garzanti, 1970, p. 13.
“un'opportunità a lungo desiderata, quale era quella di penetrare più addentro nella vita dell'anima del fanciullo.”

- 8) Padre Barbera,
Le Case dei bambini e l'autoeducazione, in «La Civiltà cattolica», a. 70°, vol. II, quaderno 1651, 5 aprile 1919, pp. 39-49. ; quaderno 1655, 7 giugno 1919, pp. 430-436.
Il metodo Montessori applicato all'educazione religiosa nei bambini, in «La Civiltà cattolica», a. 73°, vol. IV, quaderno 1739, 2 dicembre 1922, pp. 451-459.
- 9) *Le Case dei bambini e l'autoeducazione*, p. 41.
 “come sembrano dire le sue parole, ella ricaderebbe nell'errore della scuola «scientifica» da Lei combattuto;”
- 10) M. Barbera, *L'educazione nuova e il metodo Montessori*, p. 117, 1927
 前掲の二つの論文を一冊にまとめる, 1946に書名をタイトルを改めて出版された。
- 11) *Il metodo*, 1909, 1913, p. 5.
 “Una esperienza pedagogica, la quale sembrerebbe aprire una via di pratica attuazione ai nuovi principi che tendono a ricostruire la Pedagogia.”
- 12) *Il metodo*, 1926, p. 5.
 “una esperienza pedagogica, la quale sembrerebbe aprire una via di pratica attuazione ai nuovi metodi che tendono a dare alla Pedagogia una più larga utilizzazione delle esperienze scientifiche, senza rimuoverla dalle sue naturali basi dei principii speculativi. Si asserisce con esagerazione, e se ne parla da molto anni, che anche la Pedagogia, come già fece la Medicina, tenderebbe ad esulare dai campi puramente speculativi, per fondare le sue basi sulle indagini positive dell'esperienza.”
- 13) *Il metodo*, 1909, 1913, p. 8.
 “la vera fusione tra le scienze sperimentali, che hanno indubbiamente preparato un materiale utilizzabile al rinnovamento teorico della pedagogia, e l'arte educativa dei maestri esercenti.”
- 14) *Il metodo*, 1926, Introduzione. “La benedizione apostolica... sia pegno di quelle grazie e di quei celesti favori che auguriamo per rendere fecondo di bene Il Metodo della Pedagogia scientifica”
 21 novembre 1918, Benedictus S. S. XV.
- 15) *Il metodo*, 1926, p. 341. Edizione critica, p. 657.
 “I bambini sono così capaci di distinguere fra le cose naturali e le soprannaturali, che la loro intuizione ci ha fatto pensare ad un

periodo sensitivo religioso: la prima età sembra congiunta con Dio come lo sviluppo del corpo è strettamente dipendente dalle leggi naturali che lo stanno trasformando. Io ricordo una bambina di due anni, che messa davanti ad una statuetta del Bambino Gesù, disse:

«Questa non è una bambola!»

- 16) *Il metodo*, 1926,. Edizione critica, p. 677.
 “sentiamo appieno, dovrà essere risolto in modo da dare ovunque alla religione un posto preminente.” (*Edizione critica*, p. 677.)
- 17) 『カトリック教会 文書資料集』(A. ジェンマーマン監修, 浜 寛五郎訳, エレンドル書店, 1976), 554-565頁, 参照。
- 18) M. Barbera, “*Luci ed ombre nel metodo Montessori*”, in 《La Civiltà Cattolica》, Vol. II, quaderno 1917, 3 maggio 1930, pp. 239-248.
- 19) G. Casalotti, *La Chiesa e l'educazione Documenti fondamentali*, Armando Armando, 1963, p. 28.
 “Falso è perciò ogni naturalismo pedagogico, che in qualsiasi modo esclude, o menoma, la formazione soprannaturale cristiano nell'istruzione della gioventù; ed è erroneo ogni metodo di educazione che si fonda, in tutto o in parte, sulla negazione o dimenticanza del peccato originale e della Grazia e quindi sulle sole forze dell'umana natura. Tali sono generalmente quei sistemi odierni di vario nome, che si appellano ad una pretesa autonomia e libertà sconfinata del fanciullo, e che sminuiscono o anche sopprimono l'autorità e l'opera dell'educazione, attribuendo al fanciullo un primato esclusivo d'iniziativa ed un'attività indipendente da ogni legge superiore naturale e divina, nell'opera della sua educazione.”
- 20) *ibidem*, p. 28.
 “《La stoltezza è legata al cuore del fanciullo e la verga della disciplina la scotea di dosso》. Sono dunque da correggere le incrinazioni disordinate, promuovere e ordinare le buone, sin dalla più tenera infanzia, e soprattutto deve illuminare l'intelletto e fortificare la volontà con le verità soprannaturali e i mezzi della grazia, senza di cui non può ne dominare le perverse inclinazioni ne raggiungere la debita perfezione morale.”
- 21) M. Barbera, “*Luci ed ombre nel metodo Montessori*”, in 《La Civiltà Cattolica》, Vol. II, quaderno 1917, 3 maggio 1930, p. 239.
- 22) *Il metodo*, 1909, p. 22.

“Quando l’eroismo è finito in un esercito—i premi e i castighi non potranno far altro che compiere l’opera di disfacimento, infiltrandovi la corruzione.”

- 23) *Il metodo*, 1926, Edizione critica, pp. 101-102

“In tutto quello che diciamo dei premi e e dei castighi non intendiamo svalutare il valore pedagogico fondamentale, che riposa sulla stessa natura, ma soltanto combattere l’abuso e il pervertimento, onde, da mezzo che essi sono se ne fa quasi un fine. In fatti, secondo il buon senso naturale, il premio e il castigo sono appunto un mezzo per far conoscere praticamente … che un’opera è buona o cattiva, lodevole o biasimevole;”.

- 24) M. Barbera, “*Luci ed ombre nel metodo Montessori*”, p. 242.

“Oggi si festeggia la liberazione dell’anima del bambino, poichè si è scoperto che egli, nella costrizione dei vecchi metodi pedagogici, era un sofferente, una personalità diminuita nelle sue facoltà intellettuali e morali.”

- 25) *ibidem*, p. 242.

“I nostri studi sono diretti a trovare i mezzi di sviluppo del bambino da una parte, e dall’altra quelli di limitare o meglio di eliminare la personalità dell’insegnante.”

- 26) *ibidem*, p. 243.

“I nostri studi sono quelli di trovare i mezzi necessari allo sviluppo del bambino da un lato, e i limiti del nostro intervento dall’altro. Noi non dobbiamo anzichè espanderci, limitarci, e poi osservare che cosa il fanciullo liberato ci può rivelare. Questo conduce ad un’altro concezione del tutto opposta a quella che era rimasta per tanto tempo incrostata nell’animo degli educatori. E ci ricorda il detto di Cristo, il quale rivolgendosi agli uomini diceva: Se non vi convertirete e non vi farete simili ai fanciulli non entrerete nel regno dei cieli.”

- 27) *L’inaugurazione del XV Corso internazionale “Montessori”*, in *«Annali dell’istruzione elementare»*, a. V, fasci. 1, febbraio 1930-VIII, pp. 28-37.

ここの部分は、Paola Trabalzini, *Il metodo Montessori nella critica cattolica (1909-1934)*, p. 136. より引用。

- 28) M. Casotti, *Il metodo Montessori e il metodo Agazzi*, La Scuola, 1955 (I edizione 1931)。この著書の第一章は1930年に発表された次の論文を収録し

たものである。

- Luci ed ombre nel metodo Montessori*, in 《Scuola italiana moderna》, a. XXXIX, n.30, 17 maggio, p. 343 e n. 31, 24 maggio 1930, p. 375. *Gli incastri e le figure geometriche e la didattica montessoriana*, n. 32, 31 maggio 1930, pp. 365-366. *La fantasia e la sensibilità del fanciullo e il "metodo Montessori*, n. 33, 7 giugno 1930, pp. 377-378 *Le due anime della Montessori*, n. 34, 14 giugno 1930, pp. 389-390.
- 29) G. L. Radice, *La nuova edizione del «Metodo della pedagogia scientifica» di Maria Montessori*, in 《L'Educazione Nazionale》, a. VIII, 7, luglio 1926, pp.33-50
 “è bene tener presente che di Montessori ce ne son due, non una. Noi dobbiamo scegliere quella che ha maggior consonanza cogli spiriti della tradizione pedagogica italiana e cogli ideali della riforma della scuola.” p. 50.
- 30) G. Cives, *Maria Montessori pedagogista complessa*, Edizione ETS, 2001, p. 192. *I periodici montessoriani in Italia da «L'Idea Montessori» a «Opera Montessori»*
- 31) M. Montessori, *I reattivi psichici*, a. I, n. III, 15 marzo 1931-IX, Montessori, pp.3-8. また A. Scocchera, *Due reattivi "teologici" di Maria Montessori*, in 《vita dell'infanzia》, a. XLI, n. 5-6, maggio-giugno 1992, pp. 7-10. として採録。
- 32) *Luci ed ombre cattoliche sul metodo Montessori*, in 《Montessori》, a. I, n. IV, aprile 1931-IX, pp. 33-36.